

琉球大学学術リポジトリ

ワーズワースのルーシーと女性たち

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学教育学部音楽科 公開日: 2011-05-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 瀬名波, 榮喜, Senaha, Eiki メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/20081

ワーズワースのルーシーと女性たち

琉球大学名誉教授
名桜大学教授
瀬名波 榮 喜

イギリス最大のロマン派詩人ウィリアム・ワーズワースは、1798-9年の厳冬をドイツの Goslar で過ごした。18世紀最悪の厳冬といわれ、妹ドロシーと共にドイツ語を学ぶ目的でやってきたのだが、ドイツ人と接することによってその言語を学ぶことなく、二人は殆ど家の中に閉じ込められた状態であった。そのような状態で、彼らは何を想い、何を考えたのだろうか。異国にあって先ず想い起こされるのは故郷のことであろう。詩人が、Goslar とは対照的な自然美に富んだイギリス北西部に位置する故郷湖畔地方に思いを寄せ、幼少年時代を回想し、詩作に興ずるのはきわめて自然といえよう。いわゆる「ルーシー詩群」と呼ばれる5篇の詩は、その時のそのような精神状態の中から生まれたものである。これらの詩を通して詩人を取り巻く女性とルーシーとの関係を論じてみたい。

ワーズワースは自然詩人といわれているが、単なる自然詩人ではない。自然と人間の関係、否自然と人間の交感をうたう詩人であり、ルーシーも自然と密接な関係を維持しつゝ成長している。ワーズワースの短篇詩中最高の傑作といわれる「1798年7月13日ワイ川再訪の際二、三マイル上流にて詠める詩」は、自然が人間形成に如何に深い影響を与えたかをうたっている。詩人にとって自然は、

The anchor of my purest thoughts, the nurse,
The guide, the guardiam of my heart, and soul
Of all my moral being (109-11).

である。彼にとって、自然とは最も純粋な思想の安住の地であり、わが心情の乳母であり、指導者であり、保護者であり、そしてわが道徳的存在の魂である。

また、長篇詩中最高の傑作といわれる「序詩」の中でも次のようにうたっている。

Fair seed-time had my soul, and I grew up
Fostered alike by beauty and by fear :
Much favoured in my birth-place, and no less
In that beloved Vale to which erelong
We were transplanted (1850, I, 301-5).

詩人は生まれ故郷コカマスやグラマースクールのあるホークスヘッド時代、自然を友とし、自然体験を通して美と恐怖によって詩人に成長することができた。実に自然は教師である。また8歳の時母を失い、13歳の時父を失った少年ワーズワースにとって自然は母でもあり、父でもあったのである。

ところで「ルーシー詩群」とは Strange Fits of Passion Have I Known, She Dwelt among the Untrodden Ways, I Travelled among Unknown Men, Three Years She Grew in Sun and Shower, A Slumber Did My Spirit Seal から成り立っている。これらの詩のタイトルは各々の第一スタンザの第一行であり、何れもルーシーとい名前は見あたらない。第一の詩「恋の不可思議な発作を私は知った」では、第二スタンザで「私の愛した彼女」として紹介され、第七の最終スタンザで「もしルーシーが死んだのでは！」と始めて本名が出てくる。第二の詩「彼女は踏みならされてない道に住んでいた」では、そのタイトル通り第一スタンザに「彼女」として登場し、第三の最終スタンザで「ルーシーが死んでしまった」とアイデンティティーを明らかにしている。第三の詩「私は知らない人々の中を旅した」

においては、第三スタンザで「彼女」として現われ、次の最終スタンザで「ルーシーが遊んだ木陰」と彼女をアイデンティファイしている。第四の詩「彼女は三年間太陽と雨の中で成長した」では、最初の第一行に「彼女」が現われ、第七の最終スタンザで「ルーシーの生涯は終わった」と名前を明らかにしている。詩群中最後に配置された「「眠りは私の魂をつゝみこんでいた」では、「彼女」はアイデンティファイされることなく詩は終わっている。も早アイデンティティーは必要なしということか。

何れにしろ、ルーシー詩群においては、「彼女」という代名詞が先行し、最終スタンザまではそのアイデンティティーを明らかにしていない。不特定の「彼女」から特定の「ルーシー」への移行パターンは読者の好奇心を刺戟し、そのアイデンティティ確立へかきたててしまう。一体ルーシーとは誰か。

さらに問題となるのは、各詩の語り手である。何れも「私」となっている。第一の詩では、不可思議な恋の発作を体験したのは「私」である。第二の詩で、彼女が生きていることと死んでしまったということに大きな相違を感じたのも「私」である。第三の詩で、知らない外国人の中を旅したのも「私」である。第四の詩においては、自然によるダイアログが詩の大半を占めているが、彼女が死んでしまって、残していったものといえば「このヒース、この静かな落ちついた情景、そして過ぎし日の思い出」であったが、それらは誰に？「私」にであった。最後の詩においても、「人のいづく恐怖」を感じなかったのは「私」であったのである。一体「私」とは誰か。

ルーシー詩群中、第四の詩を除けば、他は皆バラッド形式である。バラッドにおいては「私」が登場して、その抒情性を高めるために、「私」を登場させることは、一種のコンヴェンションとなっている。従って、「私」が登場したからといって、何ら不思議ではない。また詩人自身とは限らない。しかし、詩の改革を志しているロマン派詩人ワーズワースが果たして伝統的なコンヴェンションに追従していくだろうか、という疑問がある。ワーズワースは自分自身の実体験に基づいて、想像力と創造力を発揮して詩を創作する詩人であるからである。

「抒情民謡集」の序文(1800)に従えば、詩は静寂の中に想起こされた感情にあるという。そしてよい詩というものは、力強い感情の横溢したもの、つまり原体験を時間的にも空間的にも距離をおいて追体験するところから詩は生まれると主張している。ここで強調すべきものは、ブレインではなくハートである。ちょうど泉の水が湧きあふれて流れ出るように、詩人の胸に感情が湧きあがり、それがあふれ出て詩になるのだという。この詩論に従えば、ルーシーなる乙女が無から生じた、いわば純粋に想像の産物であるとは言い難い。また、詩の中の話し手である「私」が全くフィクションであるとも言い難く、「私」が詩人自身であっても何ら不自然ではないだろう。そうだとすれば、ルーシーと「私」との関係は詩人と詩人を取り巻く女性の関係と解釈することも可能であろう。

ワーズワースは、ルーシーが誰であるか、全く説明していないが、第一に考えられるのはフランス女性アネット・ヴァロンである。詩人のフランス語の家庭教師である。彼は1791年11月11日、21歳の時、フランスに渡った。詩人にとってフランスといえば、自由、平等、博愛のスローガンを掲げて戦ったフランス大革命に大きな夢を託している国であった。ケンブリッジ大学時代には、革命一周年の前夜パリに着き、全ヨーロッパが喜びに満ち溢れ、フランスは黄金時代の頂点にあって、人間性は生まれ変わったように実感したのである。大学卒業後、単にフランスは憧憬の地であっただけではなく、将来金持ちの家庭教師になり世界を広く旅したいと思い、フランス語の勉強を意図してフランスに渡ったのである。アネットに会ったのはその時である。

アネットは王党派であっただけでなく、カトリックでもあったので、共和主義者でありプロテスタントであった詩人が彼女と結婚したにしても決して幸福な結婚生活は期待できなかったであろう。二人の間にカロラインなる娘が誕生するようになるが、それは若気のあやまちといってもよからう。しかし、何よりも二人の仲を絶ち切ってしまったのは、1793年2月1日にフランスが英国に対し宣戦布告をしたことである。詩人は生まれたばかりの娘の顔を見ることなく、1792年12月ついに英国に帰国してしまった。そして、1802年7月妹ドロシーと共に休戦状態に乗じてフランスを訪問するまでの10年間アネット

とわが子に会うことはなかったのである。正に二都物語といえよう。その10年間に二人の若き熱烈な愛情は冷えきってしまったのである。

ワーズワースのフランスに対する態度も一変した。彼がフランスを後にしたとき、恐怖の時代は始まっていた。1793年1月21日、フランス王ルイ16世は断頭台の露と消えた。詩人は、フランス人は革命初期の目標を見失い、自己防衛の戦いから侵略戦争へと変えていったと「序曲」の中で述懐している。ルーシー詩群第三の詩で「あのメランコリーな夢」は去ったとうたっているが、それはフランス大革命に対する幻滅感を表現したものと見えよう。

たしかにアネットは、イギリスに来たことはない。第三の詩でルーシーは英国の自然の中で生まれ育った乙女であり、その上若くして死んでしまったことを考えると、ルーシーをアネットとアイデンティファイするには大分無理があるように思われる。アネットの人格、外観等はルーシーのそれではない。彼女は英国の土壌や空の産物ではなく、都会育ちである。そして彼女はワーズワースの描く因習的な、物静かな女性ではなかった。

しかし、ワーズワースが1798-9年の厳冬の中にあって、アネット親子を置き去りにしたことに對する自責の念は拭い去ることはできなかったであろう。ゴスラー滞在中、詩人は自分のフランス体験を静かに思い出す時間が十分にあった。ルーシー詩群を通じて「死」のモチーフが一貫しているのを見ると、アネットへの過去の愛情に対する悲しみをカムフラージュしていると解釈することもできるであろう。

第二に考えられるルーシーのモデルは、メアリー・ハッチンソンである。詩人がアネットに会ってフランスから英国に帰国した後、結婚した女性である。彼は子供の頃から彼女をよく知っていて、ペンリス小学校では同じ本を共に読んでいたという。アーサー・ビーティーは、「ルーシー詩群」は彼女に呼びかけられたものである、と述べている。⁽¹⁾ 事実、彼が結婚する一年前、「私は知らない人々の中を旅した」という第三の詩を彼女に送っている。またその詩は、「彼女は踏みならされていない道に住んでいた」を読んだ後に読まれるべきであると彼女に手紙を書いていた。これらを総合すると、メアリーがルーシーであると考えられないこともない。

しかし、メアリーについて書いた *She Was a Phantom of Delight* の詩では「彼女は完璧な女性」と理想化されているが、実際は決してルーシーのような美しい女性ではなかった。1807年ドゥ・クインシーが初めて彼女に会ったときの初印象は決してよいとはいえない。彼は「彼女は美しくもなければ器量もよくなかった…。彼女は無口で…」と語っている。⁽²⁾ これが事実とすれば、彼女がルーシー詩群創作の直接のインスピレーションとなったとは言い難い。それは何故か。彼女がルーシーに似ているのは、彼女の沈黙と素朴さだけであろう。

なお、もしルーシーがメアリーであるならば、ルーシーのアイデンティティーを秘密裡に隠す必要は全くないであろう。事実、1798年に書かれた詩 *To M. H.* の中では、はっきりと彼女の実名が登場してくる。ただし、アネットに関する限り、ルーシーのアイデンティティーをカムフラージュすることは、メアリーとの関係が無難なものにしていくためにも必要であったらうことは十分考えられることである。

ルーシー詩群が一般的に「死」をテーマにしており哀愁を帯びた調べに満ち満ちていることを考えると、メアリーの妹マーガレットの死がそれに影を投じているのではないか。彼女は、1796年春結核でこの世を去っている。彼女の病状についてはワーズワース家にとっても重大関心事であり、妹ドロシーは1796年 *Jane Marshall* 宛に次のような手紙を書いている：「私はメアリー・ハッチンソンから悲しいお手紙をもらいました。今までにはマーガレットは死んでいるのではないかと思います。メアリーはソックバーンで結核から回復する見込みは全くないマーガレットの看病をしています。」⁽³⁾ そしてワーズワース自身も第二の詩「彼女は踏まれざる道の中に住んでいた」のオリジナルの中には次の一節が含まれていた。

Slow distemper checked her bloom

And on the heath she died.
Long time before her head lay low
Dead to the world was she.⁽⁴⁾

忍び寄る病魔が彼女の花の蕾をつみとってしまい、彼女はヒースの上に死んでしまった、というのである。詩人の愛の対象はどこまでもメアリーであったわけだが、妹の死によって、それがルーシー詩群の詩的インスピレーションになったことは十分考えられることである。そうでなければ詩人にとって忘れ難い、ある知られざる少女に対する愛と悲しみの中からルーシー詩群が生まれたといえるかも知れない。

終りに詩人の妹ドロシーの存在を忘れてはならない。詩人とドロシーの関係は、兄弟の中で最も親密なものであった。彼女がいなければ、おそらく英文学史上に輝やくロマン派詩人は生まれてこなかったかも知れない。詩人は *The Sparrow's Nest* と題する詩の中で次のようにうたっている。

She was with me when a boy,
She gave me eyes, she gave me ears;
And humble cares, and delicate fears;
A heart, the fountain of sweet tears;
And love, and thought, and joy (16-20).

彼女は詩人にとって詩人に最も大切な感受性を涵養してくれた恩人である。また長篇詩「序曲」の中でもドロシーのことを *the beloved woman* と呼び、さらに *She, in the midst of all, preserved me still / A poet...* (X, 905-921) とうたって、自分が詩人として今日あるのは妹のおかげであるといっている。フランス革命の残酷さに幻滅を覚え、アネット事件に煩悶し、意気消沈しているとき、彼本来の詩人の状態に引き戻すことができたのは実に彼女に負うところ大であった。

コウルリッジが、ルーシーは妹ドロシーであるとアイデンティファイするのも全く理由がないのではない。ドロシーに関する詩の中で、ルーシーという名前も使用されている。*The Glow-worm* やゴスラーで書かれた詩 *Nutting* がよい例であろう。しかし、たえずドロシーがルーシーとして登場するとは限らない。*The Sparrow's Nest* ではドロシーは *My Sister Emmaline* となっている。その他 *Tintern Abbey* の中でも *my dearest sister* と呼びかけ、彼女を詩の中で不朽ならしめている。

The Glow-worm の中で、ドロシーとエマリンをアイデンティファイするに何ら憚るところはないのに、ルーシーをアイデンティファイしないのはどういうことか。詩人は何故これらの詩の中でルーシーを死なせるのか。もしルーシーがドロシーであるならば、若くして死ぬことはないであろう。彼女は詩人よりも長生きしているのである。Frederick W. Bateson は、詩人とドロシーの関係は普通ではなく、近親相姦の関係にある。従って、罪の意識を抹殺するために彼女を詩の中で殺してしまったのだと精神分析的な解釈をしている。⁽⁵⁾ しかし、人間は深く愛している人がいると、その人が死んだらどうしよう、と想像するようになるのはごく自然だと思いが如何だろうか。

たしかにドロシーは、ルーシー詩群の中で描写されているように背も高く、堂々として、美しい女性ではなかった。De Quincy が言っているように、彼女は小さくて、背は低く、細く、その上男の子のようであった。それにしても、ドロシーに対する詩人の感情がルーシー詩群に反映されているとみて間違いはないであろう。

しからば、ルーシーとはどのような女性であっただろうか。彼女は実に短い生涯の中で、自然による教育を受け、自然そのものであったといっても過言ではない。自然の植物や動物の属性がそのまゝ、ルーシーの人格の一部を形成しているからである。彼女はすみれのように美しく、子鹿の如く野性的である。大自然の中の浮き雲、しだれ柳、さゝやく小川の流れ、夜空の星を友としている。しかし、何よりも重要なイメージは光のイメージであろう。第一の詩において、ルーシーは月とアイデンティファイされ、第二の詩では星にたとえられているように、彼女は名前のおり光そのものである。彼女の名はいわゆる「光ちゃん」である。「ルーシー」は語源学的にもラテン語で「光」を意味する。

詩人は、彼女が大変生き生きとしていて、活気に満ち満ちているので歳月に左右されることはないと思つたと書いている。しかし、彼女の純心無垢な野性味も、優雅さも顕著な美もすべて死に帰してしまうのは皮肉といわざるを得ない。まさに *insensate thing* になってしまう。彼女的美を称賛する者もいなければ、愛する人もいなかったが、彼女の死は詩人に大きなインパクトを与えるのである。彼女が彼に残していったのは何であつたか。それは静寂なヒースの平原と「今まで存在していたもの、そして今後またと存在することのないものの思い出」だけである。自分自身の運動能力はなくなつてしまつたが、今や岩や石や木々と共に地球の一部となりその自転と共に止むことなく運動しているのである。

このルーシー詩群に描かれたルーシーの精神的、身体的人間像をそして彼女の短かい生涯を思うとき、完全にアイデンティファイできる女性がいるだろうか。例えば、アネット、メアリーそしてドロシーも決して若くして死んでしまつたのではない。また、完全に自然化された女性がいたろうか。もしいたとしてももはやそれは人間とは言えないであらう。ルーシーは、詩人がアネット、メアリー、マーガレット、そしてドロシーを分解・融合・総合し、「静かな、物悲しい人間性の音楽」を聞きながら彼の自然観に照らして理想化し、想像力と創造力によって創り出したものと考えべきであらう。無から有を生じせしめることができないのであれば、ルーシーを完全に、そして純粹に想像の産物ということとはできないであらう。

Notes

1. Arthur Beatty, ed., Representative Poems (New York : Doubleday, 1937), p. 318.
2. Thomas De Quincy, Autobiographic Sketches with Recollections of the Lakes (London : James Hogg & Sons, 1844) pp. 240-2.
3. William and Dorothy Wordsworth, The Early Letters of William and Dorothy Wordsworth, 1787-1805, ed. Ernest de Selincourt (Oxford : The Clarendon Press, 1935), p. 152.
4. Ibid, pp. 203-206.
5. Frederick W. Bateson, English Poetry, A Critical Introduction (London : Longmans, Green, 1950), p. 34.